

那須秀至—四次元の絵画

1950年 埼玉県与野市(現、さいたま市)生まれ。

1977年 以来ドイツ在住。

日、独の大学で芸術を学び、1980年代より、建築空間との関連を強く意識した重層・立体的画面の抽象絵画の制作に取り組んでいる。

那須秀至の絵画はそのほとんどが正方形か長方形の面の組合せから成る。それらは、画面の内側の空間と画面を取り巻く空間の美的な関連性を認識させる指標であり、いわばその関連性を忠実に反映した二次元の鏡像である。他方上質の和紙を使い、蠟画法(エンカオスティック)の技術を駆使した淡い色調のモノクロームな画面は、光の変化で微妙に変わる抽象的な深淵さを感じさせると同時に、幾何学的な形と色面の精巧なコンポジションで特有の絵画空間を創り出している。明と暗、表層と奥行き、固形と流体、空間と時間、自然と文化、思考と感覚が一つのまとまった全体

像に構成されている。それは日常性と創造行為という対極関係を超越的に融合させる、いわば四次元的な場ともいえよう。

那須がいつも立ち戻る正方形という形は、芸術と現実という相反する力が、一瞬、象徴的に、時間を超越した瞑想的な調和の世界に辿り着くための隠喩なのであろう。そして今回のSPICAでの個展が、水を使ったオブジェ『鏡池』の日本での初めての発表になるという。

那須の絵画と『鏡池』が日本の鑑賞者のまなざしにどのような変化を与えるか楽しみである。

Dr. ロルフ・ラウター

前フランクフルト近代美術館 主任学芸員・館長代理
マンハイム・クンストハレ美術館 館長